

フェリス女学院
2006 年度事業報告



目次

| ページ | 項目 | 内容 |
|-------|---|--|
| 1 | 理事長挨拶 | フェリス女学院 「For Others」とともに 理事長 小塩 節 |
| 2～3 | 事業の概要 2006年度学院事業報告 | 学院長 岡野 昌雄 |
| 4～5 | 部門別 事業総括 | 大学 学長 本間 慎 中学校・高等学校 校長 中村 晴子 |
| 6～14 | 1 経営運営に関する事項 2 財務に関する事項 3 施設設備に＼ 4 教育研究＼ 5 その他＼ | 経営改善計画 他 財政に関する施策報告 校舎施設関連工事 他 大学部門 中学校・高等学校部門 寄付金活動 他 |
| 15 | 財務の概要 2006年度決算総括 | |
| 16～26 | 法人の概要 学院の成立ちと沿革 年譜 組織 表(1)～表(6) 役員・教職員の概要 | 学校・学部・学科等の状況 学生生徒等納付金 他 |

他人のために FOR OTHERS

めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。

(フィリピの信徒への手紙 2:4)

フェリス女学院において永くまもられてきたモットーは「For Others」という一句です。

自己中心でなく、「他者のために奉仕する」という意味で、新約聖書の「フィリピの信徒への手紙 2:4」にある「めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい」に由来しています。

フェリス女学院 「For Others」とともに

理事長 小塩 節

フェリス女学院は、明治の初め、メアリー・E.キダーの手により日本で最初の女子教育の学び舎（や）として建学されました。以来、フェリスの上には神の愛がたえず豊かに注がれてきました。関東大震災や第2次世界大戦中の軍による校舎接收、その他の多くの困難と労苦のうちにあっても、神さまの守りは変わることなく、ここに学ぶ者は神と人ともに愛され、愛する、自立した人として育ち、それぞれの道を歩んでいます。これからも、私たちは自立的人間教育を毅然として進めていきます。

昔からフェリスの強みは英語教育と言われておりますが、それだけではありません。外国語や世界の文化・学問を学びとり、自己形成をなすためには、まず自分自身の母語をしっかりと身につけ、正しい言語を用いて考え、表現し、他者と交流する人間としての力と心が必要と考えています。次の時代を担う女子たちにとって若竹のようにしなやかに自己を確立させ、伸ばすことが使命です。しかもそれが究極的には自分だけの人生をうまく生きていくためでなく、聖書的な深い意味での“ For Others ” 同胞、社会、世界の人びとのために、人びとのお役に立つように、人びととともに、ときには「人びとの身代わりにもなる」崇高な覚悟をもつ人間に育てることが原点です。

現在、学院は中学、高等学校から大学、大学院を擁し、伝統の山手の丘と緑園の地で校舎設備を整えて教育を行っています。規模は壮大ではなく、およそ考えられる限りの設備の全てはないかもしれませんが、しかし、創立130周年を記念して、この学院で教え働く教職員、同窓生、学生生徒のご家族、多くの関係者の非常な努力によって整えてきました。そして、創立140年も近い歴史に培われた同窓会や、全国規模の「維持協力会」そして奨学会の強力なサポートは、これからも歩みつづける学院にとって非常に心強い支えとなっています。

2006年度は硬直した財政建て直しに向けた取組みを本格的にスタートした年でした。緊縮予算のもと大きな事故も無く順調に終えたことを報告することができ、感謝いたします。また、前年度に続いて2006年度も次年度入学志望が順調であったことは全教職員一丸となった努力であったし、これからも続くと存じ、重ねて感謝しております。先人たちが遺してくださった山手地区には、有数の近代建築の文化財施設も含まれています。引き続き、財政の健全化を進め、一日でも早く、これらをよりよい形で教育に供するために再整備できるよう準備をすすめていくことが学院の次なる課題とみています。

2006 年度 学院事業報告

学院長 岡野 昌雄

総 括

2006 年度は、創立 150 周年にむけた学院将来計画「グランドデザイン策定」を目指し本格的に検討開始する年として位置付け、様々な施策を計画に盛り込んだ一年であった。各部門における事業計画は、おおむね計画通りに実行でき、財政健全化を目指す経営改善計画も着実に成果を上げている。

また、同窓生から多大な遺贈寄付があった。維持協力会の募金コンサートや今回のような寄付を通じて同窓生諸姉をはじめとする学院を支援して下さる関係者各位に改めて大きな力と励ましをいただいた 1 年でもあった。以下に詳述したい。

なお、この 1 年における最大の懸案は、常任理事会におけるグランドデザイン策定の実質的な作業が、理事会から委任された緊急問題の処理のために中断し遅れていることである。次年度以降の取組みとしたい。学院財政に見合った学院独自の給与制度の再構築についても、専門コンサルタント契約を結んで慎重に作業を進めている。

グランドデザイン策定について

2006 年 6 月より常任理事会が活動を始め、創立 150 周年にあたる 2020 年を目標にした学院の将来構想、いわゆるグランドデザインの策定作業に入った。中高、大学それぞれから現段階でまとめられた中期構想について説明を聞いて、問題点を整理したが、グランドデザインとしてまとめる予定の将来構想にまで内容が練られていないので、これから学院全体として本格的な検討を進めることにした。さしあたって中高・大学それぞれの自主的な議論に委ねることにした。中高については 2 号館および体育館の建替え計画を具体化することが緊急の課題でもあり、まず中高で基本計画案をまとめることを依頼した。大学においては将来構想委員会を立ち上げ検討することになっているが、委員の交代もあって具体的な作業はまだ始まっていない。2007 年度から将来構想の議論が始まる予定である。

もう一つグランドデザインの大きな課題としては、山手 37 番地を中心にした山手キャンパスのマスタープランの策定である。特に 10 号館はレイモンド設計の重要文化財に相当する貴重な建物であることから、その修理・保存について検討を進めており、早急に山手キャンパス全体のマスタープランをまとめる必要がある。2007 年度に集中的に検討することになる。

遺贈寄付とオルガンについて

昨夏亡くなった同窓生から遺贈寄付があった。学院においては今回が最初の遺贈寄付であり、第2号基本金に組み入れて遺志に沿った利用を考えることにしている。故人の母校を思う心と、最後までやさしく看取った同級生たちの友情に何よりも励まされるとともに、これを学院の教育の生きた証として、これからも建学の理念を誠実に実行する決意を新しくさせられた、嬉しい出来事であった。

また、秋には校名の由来であるアイザック・フェリス氏のご子孫にあたるアンナ・フェリス氏が逝去されたという知らせがアメリカのご遺族から入った。遺言に基づく寄付の申し出もあわせていただいている。アンナ・フェリス氏は生前より、毎年、クリスマスカードとともに学院への寄付を長年にわたりお送りいただいております、それらは全てアイザック・フェリス奨学金基金として積立ててきた。これまでのお心づくしにあたらためて感謝を申し上げたい。

中高同窓会の白菊会から、カイパー記念講堂にパイプオルガンを寄贈したいとの申し入れがあり、お受けすることにした。学院財政をよく理解して、費用全額を負担してくださるとのことであり、白菊会と中高で具体的な検討を進めているが、具体案がまとまった段階で理事会に諮って正式に学院事業として取り上げる予定である。創立140周年の記念事業の一つとして実現できればと願っている。遺贈寄付された同窓生も生前カイパー記念講堂にオルガンの設置を強く望んでおられたので、この計画が実現されれば喜んでいただけるであろう。

2006年度も事業計画はほぼ予定通りに実行され、さらに予定外の大きな支援があり、これまでに培われた伝統の力をあらためて感じさせられ、学院全体が協力して今後も建学の理念を誠実に、また地道に続けることで、こうした支援にしっかりと応える責任を強く感じている。

1 総括

本学は“ For Others ”の建学精神に基づいてリベラルアーツ型を基本としながらも、大学院教育にも重点を置く大学である。学生の主体性を尊重し、国際性豊かな人材の育成に努めている。その実現のため、アカデミック・アドバイザー制度の実施により、一人ひとりの学生と教員との語り合いを通して、少人数の利点を活かした教育を行っている。授業科目の7割は30人以下であり、双方向性を重視したゼミ形式の授業等により、「自分が考え、発表する能力」を養成している。社会についての生きた学習を行うボランティア活動の展開、インテンシブコースの設置や海外語学実習などの多彩な語学教育の展開等により、学生自身が自ら学び自己を高める楽しさを経験できるよう努めている。

2 大学院改革 他

大学院改革として、人文科学研究科に第3専攻となるコミュニケーション学専攻設置（2008年度開設予定）の検討を行い、文部科学省への提出書類作成準備を進めた。大学院国際交流研究科では07年度からの長期履修学生制度の実施準備を行いつつカリキュラムの見直しを行った。

音楽学部は9月に海外協定校である Hope College への演奏旅行を実施した。交換留学協定校の中でも特に本学との関係の深い Hope College への旅行は、大学間協定の可能性を大学全体で再認識する機会となった。

3 今後の課題

少子化の進行に伴い、学生定員を確保することが本学においても今後困難となる可能性がある。受験生が二極化していく

状況の中で、受験生が入学したくなる魅力ある大学の教育内容とは如何なるものであるかを、本学の建学精神に基づいて検討するのが今後の課題である。

教育内容と同時に、学生が学びやすい大学として、新入生、編入学者が早期に安心して大学になじめるような学生生活支援事業の展開を推進するが、大学事務部は2006年度に学生支援を主に行う部署のワンフロア化を図り、更なる組織再編の検討を行う。勉学のみならず課外活動等を通しての人間形成への支援や健康な心身の管理への助言体制づくりを検討することが大きな課題である。また、緊急時への対応として災害時にも通信可能なシステムの導入を行う。

4 次年度に向けて：FDへの取組み 他

2006年度に設置した各学部FD委員会との連携をとりつつ、大学FD委員会（大学全体のFDを検討する委員会）において本学のFDのあり方を検討し、更なる教育の質の向上を目指す。FDへの取組みは、2008年度に予定する大学基準協会「大学評価」にも反映させた形で書類作成の準備を進め、基準協会への申請書類を完成させる。

施設設備の整備について、大学としては緑園体育館の建設をもって大型施設の計画は終了したが、新委員によって2007年度から開始する将来計画委員会を中心に、施設整備等を含めた長期的な大学の将来計画を検討する。2020年に向けての大学の規模や内容について、大所高所からの検討を開始し、本学の発展のための路線を集中的に検討する。

1 総括

当年度は、これまで行政の規制等によりその実現を断念しつつあった2号館と12号館をつなぐ連絡通路の完成が象徴するように、生徒の安全確保を重視した教育環境の整備に取り組んだ1年であった。

連絡通路は一部奨学会からの援助も受けて実現したもので、生徒の利便性が高まり、安全対策にも役立っている。この他、学校内へ不審者を侵入させないための対策を考えるようにとの通達が出ているので、学校周囲の崖地にも、高い金網を張り巡らせた。山手本通りの方は、景観を勝手に変えられないので、塀を高くすることはできないが、1号館と2号館の間に高い大きな門をつけた。これは、同窓会から寄贈された。石段途中の生徒通用門の門扉は低いので、春休み中に背の高い門に付け替えた。これまでの門は、卒業生からの記念品でもあり、生徒には馴染みの門であるので、残念であるが、安全対策の為にはやむをえない。

2 経費削減の取組み

2005年度に発足した学院財務問題検討部会及び日本私立学校振興・共済事業団の経営診断をうけて、将来のために2006年度は「中高予算を1,500万円削減する」ということでスタートした。教科予算に関しては、数年来値上げはなく、前年度と同一額であったのが、削減しなければならず、大変厳しいことであった。今年度は大きな出費を伴う計画を持った教科がなかったこと、高校の入学金、授業料、中学生の施設設備費を少々値上げしたことや県からの補助金で、何とかまかなえ

た。光熱費などの経費節減にも努めた。

3 今後の課題

1号館は建築してまもない建物であるので、修繕費はあまりかからないが、2号館、体育館は鉄平石、及び壁面落下の危険があるということで、補修をせまられている。体育館の雨漏りに対しては、継続して補修する必要がある。数年後には新築の予定であるが、生徒の安全面を考えると、補修に大きな費用をかけざるを得ない。

また、退職する教師の後任補充の適任がみつからず、臨時的に講師に頼ることもある。フェリスにふさわしい、よいクリスチャン教師が与えられることが今後の課題であろう。

4 次年度に向けて：IT環境について

IT社会にふさわしい人物を育てるように注意、指導しなければならないと考える。教務的な事柄も、可能な限りコンピュータ化しているが、生徒、保護者への日常の連絡まで、コンピュータ化することはできない。コンピュータに関して、問題が起きた時にすぐに対処できるよう、検討していかななくてはならないと認識しており、例えば、情報センターの体制が中高にもより幅広く及ぶようになることの可能性なども視野に入れていきたい。

1 制度・政策に関する事項、経営運営に関する事項

経営改善計画の策定と実施

学院は、財政安定化にむけ本格始動した 2005 年度に、第 3 者評価を得るために日本私立学校振興・共済事業団「経営診断」を受診した。その後、06 年 3 月に同診断結果の報告を受け、指摘内容等を盛り込んだ学院独自の経営改善計画を策定した（第 15 回財務・施設委員会承認、第 2 回理事会報告承認）。

なお、計画の具体的な施策事項は、05 年度より実施ならびに学内で検討審議を進めてきた内容を基本としており、施策は予め当該年度事業計画に盛り込んでいた事項が主となっている。同計画の概要と実施状況は以下のとおり。

経営改善計画（概要）

1 改善を要する事項

- (1) 財務状況の改善
- (2) 現実的な収支計画に基づく長期的な改善方針の策定にむけた見直し

2 経営改善に向けての目標

- (1) 財務状況の改善に関する目標

中長期目標（5～10 年以内）

帰属収支の均衡を確保し、消費収支の均衡を目指す。

- (2) 現実的な収支計画に基づく長期的な改善方針策定にむけた目標

中期目標（5 年以内）

学院財政の恒常的な安定を目指し、フェリス女学院におけるグランドデザインを策定、実施する。

以下、具体的な施策は省略

【経営改善計画 実施状況（総括）】

詳細状況は次頁以降参照

計画初年度にあたる 2006 年度は、前年度比で帰属収支差額の拡大ならびに消費収支差額の均衡を達成することができたものの、主に単年度要因による好転であるため、今後引き続き財務体質の強化に取り組む状況にある。また、グランドデザイン策定に向けた取組みとして、策定検討における組織体制の確立ならびに教職員に対する広報活動など周知に取り組んだ。2010 年度に創立 150 周年（2020 年度）にむけた長期構想（フェリスビジョン）を策定、発表することを目標として決定した。

学院グランドデザインの策定にむけ、常任理事会を本格稼働

2006 年度より学内理事及び学外理事で構成する常任理事会においてグランドデザインを集中して協議することを理事会で決定した。2010 年度に長期構想（仮称：フェリスビジョン）を発表することを目標に、定期的に審議を行っている。次年度以降も継続する。なお、グランドデザイン策定への取組みは経営改善計画の一環でもある。

学院改革の推進：組織機能の整備

2006 年 4 月より、理事会機能向上を目指し、本部事務局の機能強化を図るため、経営企画課を設置した。学院の現状を教職員に対して正しく迅速に情報公開するなどの学内広報ツール戦略を展開するなど、諸改革推進の基盤整備を図った。なお、改革懇談会の発足については教職員の意向も確かめながら慎重に検討を進めている。一方で、2006 年度は形式にとらわれずに教職員との意見交換の場を積極的にもつことを目指した。2007 年度は諸施策の具体的検討に入る。

大学入学定員ならびに収容定員の変更（文部科学省認可 4 月 1 日より実施）

全学部全学科にて入学定員ならびに収容定員の変更を行った。

入学定員 457 名 545 名、収容定員数 1,908 名 2,260 名となった。

中学校・高等学校 校納金の改定

中学校・高等学校第 2 期工事の実施等にむけ、最低限の値上げを実施した。

- 1 高等学校入学金 25 万円 30 万円に改正
- 2 中学入学時納入の施設設備費 23.4 万円 25 万円に改正
- 3 高等学校の授業料 50 万 4 千円に改正（年額 1.2 万円の値上げ）

事務局等の機能重視組織改編（次年度以降も継続）

〔大学事務部〕 学生サービスの一層の向上を目指し、緑園事務室の改修工事を実施。組織再編に向けた検討を継続して行う。

〔中学校・高等学校事務室〕 05 年度から教務系（教務係・生徒係）及び総務系（庶務係・会計係）の相互チェック体制を実施し、チェック機能の強化を図っている。06 年度はさらに複数担当制として一層の充実を図った。

〔本部事務局〕 理事会及び学内理事の経営支援に関するサポート部門としての要素を強化させるために、本部事務局の組織改編を実施した。従来の縦割り業務による課制から 2 課制に移行し、総合業務課においては、一部業務のアウトソーシングを視野に入れた事務効率向上を図った。

2 財務に関する事項

2006 年度事業計画ならびに経営改善計画に則り、以下の事項を実施した（2006 年度決算の詳細は、財務の概要参照）。

部門別コスト削減目標にそった予算執行・運営を達成

総額 1 億円のコスト削減（05 年度予算比）等を掲げた緊縮予算運営における実施初年度にあたる。合理化などの節減努力の結果、予算枠内執行を目指した。学院グランドデザイン策定にむけた建物診断の受診等、突発的な案件についても部門内におけるやりくりで対応し、順調な執行となった。次年度以降も継続してコスト削減に取り組む方針である。

〔大学部門〕

教育研究における質の堅持、業務の効率化とコスト削減の観点から、ドキュメント関連業務のアウトソーシング（2006 年 4 月～）を実施。会議会合費・報酬手数料等諸経費の支出節減を徹底した。

〔中学校・高等学校部門〕

従来から緊縮予算で運営してきたが、予算削減方針への対応として、委託費・出張旅費ならびに光熱水費等の共益費用の削減に取り組んだ。

〔本部事務局〕

委託契約等の徹底見直しや二課制改編に伴う事務コスト削減努力等により、目標削減数値をほぼ達成した。また、本部事務局で電力供給会社の見直しを行い、学院全体で月間約 8 % 程度の節減を実現した。

学院財政の中長期目標の策定と実施推進

2006 年 6 月、経営改善計画を策定した。詳細は「1 経営に関する事項」の記載のとおり。

資産運用への取り組み：経営改善計画に則り、以下の施策を行った。

借入金の繰上返済約 9,000 万円の実施による借入金残高削減の推進

05 年度に続いて日本私立学校振興・共済事業団借入分約 9,000 万円の繰上返済を行った。これによる利息軽減効果は、約 1,200 万円が見込まれる。

特定資産繰入を前提とした資金運用

資金運用基本方針を策定し、金融商品の購入による運用金利 1 % 以上の確保を目標とする中期運用計画をたてて取り組んでいる。2006 年度は、流動性預貯金のうち、約 10 億円を国債による短期運用を開始した。一連の資産運用収入は 1,500 万円超となった。また、05 年度に引き続き減価償却引当特定資産として 6,000 万円を繰入れた。

第2号基本金組入れ計画について

施設設備投資ガイドラインに則り、以下を計画し、実施した。

〔大学部門〕 大学キャンパス施設設備拡充整備資金 1億円組入
教育充実資金及び維持協力会の募金額を組入れる。06年度より組入れる。

〔中学校・高等学校部門〕 校舎建替第2期工事建築資金 2億1,500万円組入
2010年以降で予定している老朽化校舎（2号館及び体育館）の建替え工事資金として生徒の収容定員を超えた人員分の校納金及び維持協力会の募金額を組入れる。ただし、2002年度から06年度までは組み入れ額を毎年3,000万円とする（理事会決定2001年3月30日、2001年10月25日変更決定）。なお、06年度に限り、三宮康子氏の遺志に基づき遺贈寄付金1億5,900万円を加えて組入れる。

厳正な予算執行と予算管理の推進

経営改善計画における施策の一環として取り組む。2006年度においては、あいまいな事業計画に対して予算はつけないと学内に周知徹底し、学院の事業計画基本案のもと各部門が予算編成する仕組みの整備を進めた。2007年度以降も継続して取り組む。

3 施設設備に関する事項

校舎施設等の維持管理

2005 年度に学院財政の悪化を招く施設設備投資の未然防止を目的に、施設設備投資ガイドラインを策定した。同ガイドラインに則り、2006 年度は以下の事業を実施した。

2006 年度の主な該当事業は以下のとおり(総経費 300 万円以上の事業概算)

〔大学部門〕

| | |
|------------------|-------------|
| 屋外 受変電設備改修工事 | 総額 950 万円 |
| 緑園キャンパス 点字ブロック | 総額 330 万円 |
| 緑園校舎 空調機更新工事 | 総額 2,000 万円 |
| 事務部統合に伴う改修工事関連費用 | 総額 2,500 万円 |

〔中学校・高等学校部門〕

| | |
|--------------------------------|-------------|
| 2号館、12号館連絡通路設置工事関連(ボイラー解体費用等含) | 総額 3,050 万円 |
| 同上関連 側塀更新・新設工事 | 総額 800 万円 |
| 第2グラウンド法面防護工事(一部助工事含) | 総額 680 万円 |
| 門扉(寄贈分 350 万円相当含) | 総額 700 万円 |

〔本部事務局部門〕

| | |
|---------------|-----------|
| 山手体育館照明設備取替工事 | 総額 360 万円 |
|---------------|-----------|

外部専門コンサルタントによる建物施設大規模修繕計画見直しを実施

学院グランドデザイン策定にむけた検討の一環として、外部専門コンサルタント会社による学院の既存建物診断を依頼し、2007 年度以降 15 年間にわたる修繕計画案をまとめた。この修繕計画案をもとに学院の施設に関する将来計画を具体的に検討することとなる。

4 教育研究に関する事業計画

教育研究といった学校本来の事業である。学生生徒にかかわる事項で、国際交流、生涯学習、産学連携も含む。

大学、中学校・高等学校は、学院の建学の精神「キリスト教信仰に基づく女性のための教育」のもと、それぞれの使命にかなった教育研究事業を展開している。2006年度事業計画に基づく事業は以下のとおり報告する。

〔大学部門〕

大学では、学院の建学の精神に基づき、専門教育の充実とあわせ、国際ワークキャンプ活動（インド・ケララ州）をはじめとするキリスト教信仰に基づいた様々な教育活動を展開した。さらに、キャリアデザイン支援授業の展開、セメスター・アプロード、海外インターンシップ、国際交流学部創設 10 周年記念事業、e-Learning 活用の講義支援システムの導入など、女性の地位向上に関する教育、世界平和・地球環境問題教育、国際化、高度情報化社会に対応した教育充実の視点による各種プログラムを実施した。

一連の教育活動とあわせ、総合的な学生生活支援を目的とする事務部門の再編を計画し、その最初のステップとして、主に学生支援を行う事務部署のワンフロア化を実現した。

また、10年の節目を迎えた生涯学習活動は、緑園キャンパスを中心に「フェリスのオープンカレッジ」として、質の高い講座の提供と大学附属図書館等キャンパス施設の一部開放を通じて、地域社会への更なる貢献を図った。

2006年度の概要は次のとおり。

大 学

2005年度に「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」1件、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」2件が採択され、2008年度（1件は2007年度）まで毎年補助金が交付される。同採択関連事業として様々な事業を実施した。

特色GP

読書運動プロジェクト「フェリスの一冊の本」（2008年度まで継続）

2006年度交付額約1,485万円

現代GP

地球温暖化に向けた環境教育拠点の形成（2007年度まで継続）

2006年度交付額1,000万円

若い女性の視点からの音楽コンテンツ創造（2008年度まで継続）

2006年度交付額約1,116万円

採択関連事業として実施した事業

読書運動プロジェクト関連

関連授業、講演会、展示会、ビデオ上映会、各種コンクール、レクチャーコンサート、Web サイト運営、印刷物発行 他

環境教育関連

国際環境シンポジウムの開催、親子対象の公開講座、環境をテーマとした野外演奏会、印刷物発行 他

音楽コンテンツの創造関連

音楽ネット配信システムによる音楽・動画等配信、著作権教育やコンテンツ産業での実務者・研究者等を招聘した特別公開講座、学生企画イベントの実施 他

この他の新規事業

海外協定校 Hope College (アメリカ) への海外演奏旅行実施 (音楽学部)

e - Learning を活用した講義支援システムの構築 (情報センター) 他

学生生活・支援関連事業

学内活性化と課外活動の支援策

正課教育とは異なる領域において、より広く大学生活全体としての生活体験を通して、大学生活をより充実し、積極的なものとする諸取組みや、大学活性化への寄与とする諸支援策について具体的に実施。

ハラスメントのない環境づくり

教職員を対象とした諸研修や学外スペシャリストとの連携・配置等、積極的に実施。

ボランティアセンター活動

日・韓・在日の学生による平和に向けた協働プログラム事業(ボランティアセンター)や、従来からの活動をさらに積極的に推進した。

障がい者学生に対する支援体制の確立

障がい学生支援連絡会を立ち上げた。授業科目担当者との連携を図りつつ、学内点字ブロックの拡充、盲人用信号機設置への働きかけを行った。「障がい学生支援金」を制度化。

大学院

国際交流研究科では、社会人大学院生への配慮として 2007 年度導入を目指し「長期履修学生制度」の実施準備と、修士論文に代わる「修了レポート」科目の開設準備を行った。

上記事業含む、教育研究に関する事業報告詳細は別紙参照。

〔中学校・高等学校部門〕

学院の建学の精神は創立者キダールの信念であった「(日本の)女子にも教育を」であり、それは「キリスト教信仰に基づく女性のための教育」として、以下のとおり学則にその趣旨が掲載されて、今日に至っている。

高等学校学則は「本校は、キリスト教の信仰に基づいて人格を涵養し、教育基本法及び学校教育法によって中学校における教育の基礎の上に、女子に高等普通教育を施すことを目的とする。」、中学校学則は「本校は、キリスト教の信仰に基づいて人格を涵養し、教育基本法及び学校教育法によって女子に中等普通教育を施すことを目的とする。」

教育方針

中学校・高等学校は、毎日が全校生徒全員参加の礼拝から始まる。入学式も礼拝であり、卒業式も礼拝で、136年の伝統を引き継ぎ、先人に恥じない教育を行っている。また、進学校としての位置づけではなく中高一貫教育という6年間の教育の成果として進学するのであり、決して無理をしない自然体での教育、自由で快活な学校生活をすごし、結果として自立し社会で活躍する女性を送り出している。

2006年度報告

2006年度も、例年通り6月1日に創立記念式が行われた。全校生徒・全教職員がカイパー記念講堂での、記念礼拝・式典、永年勤続者表彰、記念講演会(中学1年のみ外国人墓地へ関係宣教師等の墓参)に参加し、創立136年の意義を学んだ。キリスト教関連行事(毎朝の全校礼拝、クリスマス礼拝、卒業礼拝、キリスト教教育週間、宗教講演会、奉仕週間、修養会等)、修学旅行・フィールドワーク、広島旅行、フェリス祭、合唱コンクール、スピーチコンテスト、体育大会・球技大会等いずれも学事日程上予定されていた諸行事を無事終了した。

5 その他の事業計画

本来の教育研究に付随する事業計画で、地域社会との連携、同窓会、維持協力会にかかわる事項

募金活動の推進

維持協力会について

2006年度は前年度同様、目標額を4,000万円に設定し活動を推進したところ、入金額累計は約3,600万円であった。大口の寄付が2件あった前年度並を堅持した。同窓会からの寄付や、中高が昨年度末に保護者に対し年額4万円の寄付の協力依頼などを行ったことによるものとみられる。また、10月9日に開催した維持協力会主催募金コンサートでは同窓会・奨学会等の協力のもと、当日は約950名の入場者があり、約460万円の収益金を得た。

教育充実資金について

2006年度は総じて1件あたりの申込み口数が増え、応募者272名と対前年比約4.2%減でありながらも総額約6,000万円超となり昨年度とほぼ同じ水準となった。寄付状況の伸び悩みが続く大学部門では、応募者、金額ともに何とか前年度微減に抑える一方で、中学校では、ほぼ昨年度並の応募者数を確保し、金額は2.6%増とした。なお、2007年度以降は、中学校においても2次募集を行う予定である。

財務の概要

2006 年度決算の概要

2006 年度決算は、帰属収支差額 897 百万円、消費収支差額 57 百万円であった。帰属収入は約 52.8 億円となり、対前年度比約 1.5 億円増、2002 年度以来の 52 億円台となった。一方、支出は人件費約 27.6 億円、予算比約 1,000 万円増となったものの、大規模修繕の抑制ならびに光熱水費等の経常経費の節減等により予算比 4,100 万円減、大学体育館の完成ならびに校舎取り壊し等で経費計上が発生した前年度に比べ約 3.2 億円の抑制となり、総額約 43.8 億円であった。

これまでの施設設備投資による借入金残高が 32 億円あり、依然、財務基盤に課題を残しているものの、経費抑制などの学院財政の安定化にむけた取組み等によって消費収支差額の均衡を達することができた。

なお、今年度の決算の好転は単年度要因によるところが大きい。

収入においては、主に遺贈寄付金ならびに補助金収入増によるものであり、依然、学生生徒等納付金収入の減少傾向についての対応は急務であるという課題が残る。

支出においても、前年度に続き退職者の増減によって左右する退職給与引当金繰入額や育児休業者の発生による人件費の伸びの鈍化と大規模修繕の抑制などの事由による経費削減が結果として大きな支出抑制に働いた点があげられる。人件費、経費のいずれも次年度予算においては増加が見込まれており、予断を許さない状況である。

今後も継続して経営改善計画に伴う諸対策の継続実行ならびに実効力のある予算管理と合理化による経費削減、積極的な納付金収入増に向けた展開の検討を行うなど、学院財政の安定化に重点をおく方針である。

(財務諸表類は省略)

法人の概要

フェリス女学院は、1870年(明治3年)に創設された日本で最も古い歴史を有する女学校です。130年を超える歴史の中、多くの試練を乗り越え、キリスト教に基づいた女子教育の伝統を受け継ぎつつ、現在では中学校・高等学校、大学・大学院を設置しています。

建学の精神 キリスト教信仰に基づく女性のための教育

フェリス女学院は、1870(明治3)年9月、アメリカ改革派教会の外国伝道局から派遣されたメアリー・E.キダーによって創設されました。

当時の日本は、明治維新直後の混乱期にあってまだ学制も整わず、キリスト教は禁止され、まして女子の教育には関心も払われていない時代でした。

このような状況の中で、日本の女子教育に積極的に取り組んだメアリー・E.キダーをはじめ宣教師たちの志は、幾多の試練に遭いながらもフェリス女学院の歩みに受け継がれてきました。

現在、日本で最も古い歴史を有する女学校として、キリスト教の信仰とその精神に基づいて、それぞれの人間性を深め、自由と学問を尊重し、教養豊かで敬虔な女性の育成を目指した教育を行っています。

学院の沿革 フェリス女学院とは

校名の由来

フェリスとは、一度も来日したことがなかったが、学院に対して物心両面にわたり援助を惜しまなかったアメリカ改革派教会の外国伝道局主事父子の姓です。

学院の校名は、創立時には「キダーさんの学校」「ミロルさんの学校」などと呼ばれていましたが、メアリー・E.キダーは、山手 178 番に校舎が新築された時、援助を惜しまなかった父子に敬意を表して「フェリス・セミナリーと呼びたい」と望み、その後「フェリス・セミナリー」、「フェリス和英女学校」と呼ばれるようになりました。

英語が敵性語とされた戦時下の 1941 年には、地名を冠して「横浜山手女学院」と変更されましたが、1950 年、同窓生を中心に校名復帰の声がたかまり、再び「フェリス女学院」と改称されました。

校章



校章は、1908（明治 41）年に制定された校旗をもとに、1915（大正 4）年に定められました。盾は信仰を外部の嵐から守る強さを象徴し、F と S は Ferris Seminary の頭文字です。盾の黄色は希望を、F の赤は愛を、S の白は信仰を表しています。

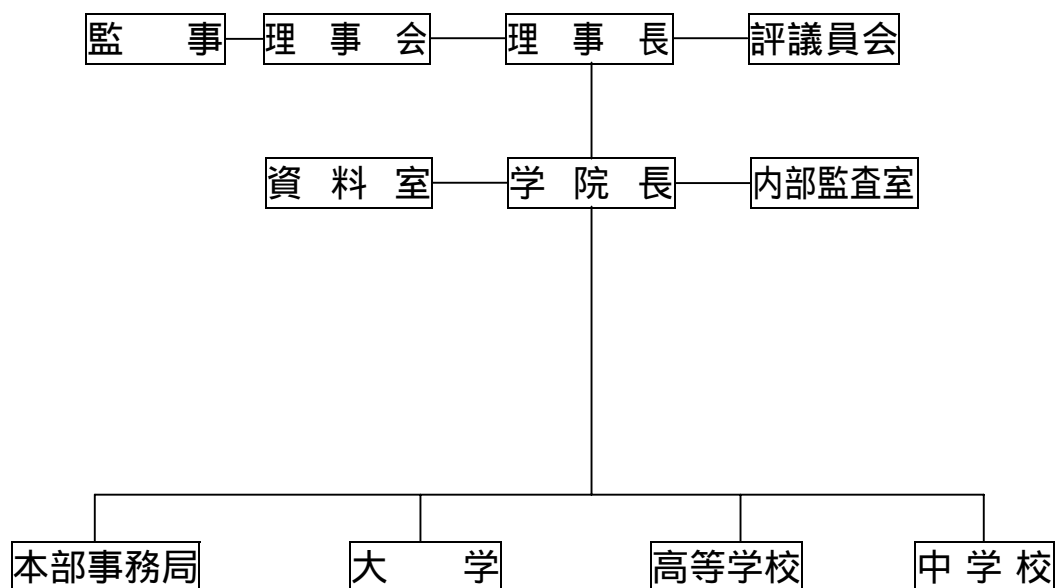
これは、「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る」というコリントの信徒への手紙 13 章 13 節の聖句に因んだものです。

年 譜

- 1870年 明治 3年 メアリー・E.キダー、居留地 39 番のヘボン施療所で英語の授業を始める
女子の学校として最も古い歴史を持つフェリス女学院の発祥
- 1875年 明治 8年 山手 178 番に校舎落成。フェリス・セミナリーと名付ける
- 1881年 明治 14年 第 2 代校長 E.S. ブース就任
- 1882年 明治 15年 1 月、学則を制定し全国に配布する
- 1887年 明治 20年 学則改正（予科 2 年 本科 4 年 高等科 2 年設置）
- 1888年 明治 21年 地下水を汲み上げる風車完成
- 1889年 明治 22年 南校舎・西校舎落成 校名を「フェリス和英女学校」とする
- 1899年 明治 32年 「私立学校令」により認可 学則改正（予科 2 年 本科 4 年 特別科 2 年）
- 1903年 明治 36年 英語師範科（3 年）付設
- 1908年 明治 41年 学則改正（予科 2 年 本科 4 年 高等科 3 年 英語師範科 3 年） 校旗制定
- 1919年 大正 8年 学則改正（予科 1 年 本科 5 年 研究科 1 年 英語専修科 3 年）
- 1920年 大正 9年 創立 50 周年祝賀会 『開校 50 年史』編集
- 1922年 大正 11年 ブース校長定年退職 第 3 代校長 J.M. カイパー就任
- 1923年 大正 12年 関東大地震により校舎倒壊焼失、カイパー校長殉職
- 1924年 大正 13年 第 4 代校長シェーファー就任
- 1925年 大正 14年 学則改正（本科 6 年 研究科 1 年）
- 1927年 昭和 2年 「専門学校入学者検定規定」による指定校となる
- 1929年 昭和 4年 新校舎竣工
- 1930年 昭和 5年 学則改正（中等部 5 年 高等部<英文科・家政科>2 年）
- 1940年 昭和 15年 日本人初代校長に都留仙次就任
- 1941年 昭和 16年 校名を「横浜山手女学院」に変更 宣教師団帰国
- 1944年 昭和 19年 戦時体制として高等部休止 校舎を日本海軍に貸与
- 1945年 昭和 20年 終戦 進駐軍校舎使用
- 1946年 昭和 21年 校舎返還

- 1947年 昭和22年 新学制による中学部設置(3年) 専門学校設置(英文科 家政科 音楽科)
- 1948年 昭和23年 高等学部3年設置
- 1950年 昭和25年 校名を「フェリス女学院」と改称
専門学校を短期大学(英文科 家政科)に改編
創立80周年を記念して現在の校歌制定
- 1951年 昭和26年 短期大学音楽科設置
- 1965年 昭和40年 短大英文科を廃止し大学(英文学科 国文学科)開学
- 1970年 昭和45年 創立100周年
- 1988年 昭和63年 大学文学部に国際文化学科設置 緑園キャンパス開設
- 1989年 平成元年 音楽学部(声楽学科 器楽学科 楽理学科)設置
- 1990年 平成2年 短期大学 廃止認可
- 1991年 平成3年 大学院人文科学研究科修士課程(英文学専攻 日本文学専攻)開設
- 1993年 平成5年 大学文学部「国文学科」を「日本文学科」に名称変更
中学校入学定員180名に変更 4クラス体制となる
- 1995年 平成7年 大学院人文科学研究科博士課程(英文学専攻 日本文学専攻)設置
- 1997年 平成9年 大学文学部国際文化学科を発展改組し、国際交流学部を開設
- 1998年 平成10年 大学院音楽研究科修士課程(声楽専攻 器楽専攻 創作表現専攻)設置
- 2000年 平成12年 創立130周年
- 2001年 平成13年 大学院国際交流研究科博士課程(国際交流専攻)設置
- 2004年 平成16年 大学文学部コミュニケーション学科設置
大学音楽学部「楽理学科」を「音楽芸術学科」に名称変更
大学院音楽研究科修士課程「創作表現専攻」を「音楽芸術専攻」に名称変更
- 2005年 平成17年 大学音楽学部「声楽学科」、「器楽学科」を統合し、「演奏学科」に改組

フェリス女学院の組織



所在地

- ・本部事務局 〒231-8660 横浜市中区山手町 178 TEL 045-662-4511
- ・大 学 山手キャンパス 〒231-8651 横浜市中区山手町 37 TEL 045-681-5150
緑園キャンパス 〒245-8650 横浜市泉区緑園 4-5-3 TEL 045-812-8211
- ・中学校・高等学校 〒231-8660 横浜市中区山手町 178 TEL 045-641-0242

表(1) 当該学校・学部・学科等の状況

2006年5月1日現在

| 学校・学部別 | | | 在籍者数 | | | | |
|-----------------|---------------|--------|--------------|--------------|------------|------------|--------------|
| | | | 1年次 | 2年次 | 3年次 | 4年次 | 合計 |
| 大学/学部 | | | | | | | |
| 文学部 | 英文学科 | | 102 | 93 | 104 | 154 | 453 |
| | 日本文学科 | | 96 | 105 | 92 | 160 | 453 |
| | コミュニケーション学科 1 | | 97 | 94 | 103 | | 294 |
| 小計 | | | 295 | 292 | 299 | 314 | 1,200 |
| 音楽学部 2 | 音楽芸術学科 | | 38 | 39 | 12 | | 89 |
| | 演奏学科 | | 66 | 65 | | | 131 |
| | 声楽学科 | | | 1 | 33 | 22 | 56 |
| | 器楽学科 | | | | 55 | 67 | 122 |
| | 楽理学科 | | | | | 11 | 11 |
| 小計 | | | 104 | 105 | 100 | 100 | 409 |
| 国際交流学部 | 国際交流学科 | | 196 | 198 | 219 | 254 | 867 |
| 小計 | | | 196 | 198 | 219 | 254 | 867 |
| 学部合計 | | | 595 | 595 | 618 | 668 | 2,476 |
| 大学院 | | | | | | | |
| 人文 科学 研究科 | 博士前期 課程 | 英文学専攻 | 1 | 8 | | | 9 |
| | | 日本文学専攻 | 5 | 10 | | | 15 |
| | 博士後期 課程 | 英文学専攻 | 1 | 1 | 4 | | 6 |
| | | 日本文学専攻 | 2 | 1 | 4 | | 7 |
| 小計 | | | 9 | 20 | 8 | | 37 |
| 音楽 研究科 | 修士 課程 | 声楽専攻 | 6 | 4 | | | 10 |
| | | 器楽専攻 | 11 | 10 | | | 21 |
| | | 音楽芸術専攻 | 1 | 1 | | | 2 |
| 小計 | | | 18 | 15 | | | 33 |
| 国際交流 研究科 | 博士前期課程 | 国際交流専攻 | 2 | 6 | | | 8 |
| | 博士後期課程 | 国際交流専攻 | | 1 | 2 | | 3 |
| 小計 | | | 2 | 7 | 2 | | 11 |
| 大学院合計 | | | 29 | 42 | 10 | | 81 |
| 大学計 | | | 624 | 637 | 628 | 668 | 2,557 |
| 高等学校 | | | 188 | 188 | 182 | | 558 |
| 中学校 | | | 188 | 187 | 186 | | 561 |
| 中高計 | | | 376 | 375 | 368 | | 1,119 |
| 学院合計 | | | 1,000 | 1,012 | 996 | 668 | 3,676 |

1 2004年度開設

2 2004年度、「楽理学科」を「音楽芸術学科」

に名称変更。05年度、「声楽学科」「器楽学科」を「演奏学科」に改組

表(2) 学生生徒等納付金

(単位 千円)

| 学校・学部等 | | 年度 | 授業料 | 入学金 | 実験実習 費 | 施設設備費 | 施設設備 維持費 | 冷暖房費 | 計 | |
|--------------------|------------------|----------|-------|-------|-----------|-------|-------------|------|-------|-------|
| 大 学 | 文学部 | 2005 | 710 | 380 | 15 | 注 a | 300 | | 1,405 | |
| | | 2006 | 710 | 380 | 15 | 注 a | 300 | | 1,405 | |
| | 音 楽 学 部 | 音楽 芸術 | 2005 | 710 | 380 | 55 | 注 b | 470 | | 1,615 |
| | | | 2006 | 710 | 380 | 55 | 注 b | 470 | | 1,615 |
| | | 演奏 | 2005 | 1,180 | 380 | 110 | 注 b | 470 | | 2,140 |
| | 2006 | | 1,180 | 380 | 110 | 注 b | 470 | | 2,140 | |
| | 国際交流 学部 | 2005 | 710 | 380 | 15 | 注 a | 300 | | 1,405 | |
| | | 2006 | 710 | 380 | 15 | 注 a | 300 | | 1,405 | |
| 大学院 人文科学 研究科 | 博士前期 課程 | 2005 学内 | 505 | 120 | 15 | 注 c | 200 | | 840 | |
| | | 2005 学外 | 505 | 200 | 15 | " | 300 | | 1,020 | |
| | | 2006 学内 | 505 | 120 | 15 | " | 200 | | 840 | |
| | | 2006 学外 | 505 | 200 | 15 | " | 300 | | 1,020 | |
| | 博士後期 課程 | 2005 学内 | 505 | 0 | 15 | " | 200 | | 720 | |
| | | 2005 学外 | 505 | 200 | 15 | " | 300 | | 1,020 | |
| | | 2006 学内 | 505 | 0 | 15 | " | 200 | | 720 | |
| | | 2006 学外 | 505 | 200 | 15 | " | 300 | | 1,020 | |
| 大学院 音楽 研究科 | 修士課程 | 2005 学内 | 800 | 140 | 110 | 注 d | 200 | | 1,250 | |
| | | 2005 学外 | 800 | 250 | 110 | " | 300 | | 1,460 | |
| | | 2006 学内 | 800 | 140 | 110 | " | 200 | | 1,250 | |
| | | 2006 学外 | 800 | 250 | 110 | " | 300 | | 1,460 | |
| 大学院 国際交流 研究科 | 博士前期 課程 | 2005 学内 | 505 | 120 | 15 | 注 c | 200 | | 840 | |
| | | 2005 学外 | 505 | 200 | 15 | " | 300 | | 1,020 | |
| | | 2006 学内 | 505 | 120 | 15 | " | 200 | | 840 | |
| | | 2006 学外 | 505 | 200 | 15 | " | 300 | | 1,020 | |
| | 博士後期 課程 | 2005 学内 | 505 | 0 | 15 | " | 200 | | 720 | |
| | | 2005 学外 | 505 | 200 | 15 | " | 300 | | 1,020 | |
| | | 2006 学内 | 505 | 0 | 15 | " | 200 | | 720 | |
| | | 2006 学外 | 505 | 200 | 15 | " | 300 | | 1,020 | |
| 高等 学 校 | | 2005 | 492 | 250 | 5 | 注 e | 100 | 102 | 15 | 964 |
| | | 2006 | 504 | 300 | 5 | " | 100 | 102 | 15 | 1,026 |
| 中 学 校 | | 2005 | 492 | 300 | 5 | 注 f | 234 | 102 | 15 | 1,148 |
| | | 2006 | 492 | 300 | 5 | " | 250 | 102 | 15 | 1,164 |

注釈

施設設備費(中高は施設設備維持費を含む)について

注 a 大学文学部・国際交流学部においては、1年300千円、2～4年 各200千円納付、総額900千円

なお、大学文学部・国際交流学部3年次編入においては、編入学時300千円 4年200千円納付、総額500千円

大学国際交流学部2年次編入においては、編入学時300千円、3～4年 各200千円納付、総額700千円

注 b 大学音楽学部においては、1年470千円、2～4年 各352千円納付、総額1,526千円

なお、大学音楽学部3年次編入においては、編入学時470千円、4年352千円納付、総額822千円

注 c 大学院人文科学研究科・国際交流研究科における博士前期課程および修士課程は、1年 学内200千円、学外300千円、

2年学内・学外とも200千円納付、総額学内400千円、学外500千円

博士後期課程は1年 学内200千円、学外300千円、2～3年学内・学外とも200千円で 総額学内600千円、学外700千円

注 d 大学院音楽研究科修士課程は1年 学内200千円、学外300千円、2年学内・学外とも200千円納付、総額学内400千円、学外500千円

注 e 高校においては、1年202千円、2年～3年 各102千円、総額406千円

注 f 中学においては、1年352千円(2005年度338千円)、2年～3年 各102千円、総額556千円(2005年度542千円)

表(3) 入学志願者数

A (一般 推薦・帰国子女・留学生・社会人)

2005年度より文学部・音楽学部音楽芸術学科・国際交流学部で大学入試センター利用試験を導入-利用試験を導入

| 年度 | | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 | | |
|---------------------------------------|---------------|---------------|---------------|-------------|----------|----------|----|---|
| | | 2003年度入試 | 2004年度入試 | 2005年度入試 | 2006年度入試 | 2007年度入試 | | |
| 大 学 部 | 英 文 学 科 | 702 | 519 | 461 | 654 | 714 | | |
| | 日 本 文 学 科 | 652 | 619 | 384 | 555 | 641 | | |
| | コミュニケーション学科 | | 438 | 617 | 740 | 929 | | |
| | 小 計 | 1,354 | 1,576 | 1,462 | 1,949 | 2,284 | | |
| 音 楽 学 部 04年度より学 部改編に伴う募集 を開始 | 声 楽 学 科 | 23 | 16 | 232 | 261 | 160 | | |
| | 器 楽 学 科 | 36 | 41 | 175 | 186 | 153 | | |
| | 小 計 | 159 | 120 | | | | | |
| 国 際 交 流 学 部 | 国 際 交 流 学 科 | 1,037 | 636 | 969 | 1,433 | 1,202 | | |
| 大 学 院 | 大 学 院 | 英 文 学 専 攻 | 4 | 6 | 7 | 2 | 5 | |
| | 人 文 科 学 研 究 科 | 日 本 文 学 専 攻 | 12 | 19 | 13 | 6 | 6 | |
| | 博 士 前 期 課 程 | 小 計 | 16 | 25 | 20 | 8 | 11 | |
| | 大 学 院 | 英 文 学 専 攻 | 0 | 2 | 1 | 3 | 2 | |
| | 人 文 科 学 研 究 科 | 日 本 文 学 専 攻 | 5 | 4 | 3 | 2 | 3 | |
| | 博 士 後 期 課 程 | 小 計 | 5 | 6 | 4 | 5 | 5 | |
| | 大 学 院 | 声 楽 専 攻 | 8 | 12 | 5 | 9 | 6 | |
| | 音 楽 研 究 科 | 器 楽 専 攻 | 16 | 11 | 10 | 13 | 4 | |
| | 修 士 課 程 | 音 楽 芸 術 専 攻 | 1 | 1 | 6 | 1 | 2 | |
| | 04年度より名称変更 | 小 計 | 25 | 24 | 21 | 23 | 12 | |
| | 大 学 院 | 国 際 交 流 研 究 科 | 国 際 交 流 専 攻 | 8 | 15 | 8 | 8 | 5 |
| | 博 士 前 期 課 程 | 大 学 院 | 国 際 交 流 研 究 科 | 国 際 交 流 専 攻 | 2 | 1 | 1 | 3 |
| 博 士 後 期 課 程 | 大 学 計 | 2,665 | 2,460 | 2,892 | 3,876 | 3,833 | | |
| 中 学 校 | | 429 | 493 | 449 | 496 | 462 | | |
| 合 計 | | 3,094 | 2,953 | 3,341 | 4,372 | 4,295 | | |

B (2・3年次編入学試験)

| 年度 | | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 |
|-------------|-------------|------|------|------|------|------|
| 大 学 部 | 英 文 学 科 | 18 | 15 | 9 | 7 | 11 |
| | 日 本 文 学 科 | 7 | 8 | 7 | 10 | 7 |
| | コミュニケーション学科 | | | | 7 | 3 |
| | 小 計 | 25 | 23 | 16 | 24 | 21 |
| 音 楽 学 部 | 声 楽 学 科 | 2 | 3 | 0 | 3 | 1 |
| | 器 楽 学 科 | 6 | 0 | 3 | 3 | 1 |
| | 音 楽 芸 術 学 科 | 1 | 0 | 2 | 2 | |
| 小 計 | 9 | 3 | 5 | 8 | 2 | |
| 国 際 交 流 学 部 | 2 年 次 編 入 | 8 | 9 | 13 | 13 | 11 |
| | 3 年 次 編 入 | 50 | 37 | 44 | 34 | 18 |
| | 小 計 | 58 | 46 | 57 | 47 | 29 |
| 大 学 計 | | 92 | 72 | 78 | 79 | 52 |

表(4) 入学検定料 (この他、2002年度より減額制度あり)

(単位 千円)(単位 千円)

| 年度 | | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 |
|------------|-------------|------|------|-------|-------|-------|
| 大 学 | 文 学 部 | 35 | 35 | 35 | 35 | 35 |
| | 音 楽 学 部 | | | 35 | 35 | 35 |
| | 音 楽 芸 術 学 科 | | | 45、55 | 45、55 | 45、55 |
| | 演 奏 学 科 | 55 | 55 | | | |
| | 国 際 交 流 学 部 | 35 | 35 | 35 | 35 | 35 |
| 大学入試センター利用 | | | | | 15 | 15 |
| 大学院人文科学研究科 | | 30 | 30 | 30 | 30 | 30 |
| 大学院音楽研究科 | | 40 | 40 | 40 | 40 | 40 |
| 大学院国際交流研究科 | | 30 | 30 | 30 | 30 | 30 |
| 中 学 校 | | 25 | 25 | 25 | 25 | 25 |

1つの専攻・楽器への出願は45,000円、2つの専攻・楽器への出願は55,000円

表(5) 寄付金 (現物寄付金を除く)

(単位 千円)(単位 千円)

| 年度 | | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 |
|----------|-------------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 本 部 | | 6 | 0 | 3 | 0 | 0 |
| 大 学 | 文 学 部 | 21,234 | 18,055 | 15,564 | 15,685 | 17,572 |
| | 音 楽 学 部 | 7,976 | 6,060 | 7,085 | 7,262 | 6,802 |
| | 国 際 交 流 学 部 | 12,725 | 11,832 | 11,499 | 11,935 | 10,820 |
| | 大 学 計 | 41,935 | 35,947 | 34,148 | 34,882 | 35,194 |
| 高等学校・中学校 | | 98,775 | 81,848 | 76,486 | 75,496 | 127,360 |
| 計 | | 140,716 | 117,795 | 110,637 | 110,378 | 162,554 |

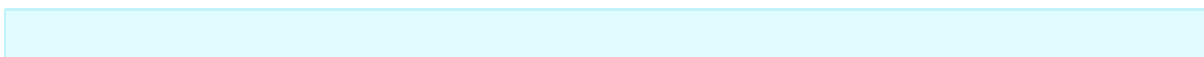
表(6) 補助金

(単位 千円)

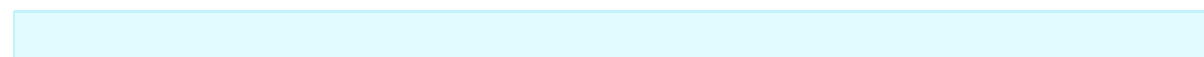
| 区 学校 | 年度 分 | 2006年度 | | | | | 2005年度 | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|
| | | 金額 | 交付団体別 | | 補助金内容別 | | 金額 | 交付団体別 | | 補助金内容別 | |
| | | | 国庫 | 地方公共団体 | 経常費 | その他 | | 国庫 | 地方公共団体 | 経常費 | その他 |
| 大 学 | 文 学 部 | 163,692 | 163,601 | 91 | 143,451 | 20,241 | 165,957 | 165,855 | 102 | 134,494 | 31,463 |
| | 音 楽 学 部 | 98,486 | 98,453 | 33 | 82,807 | 15,679 | 85,000 | 84,963 | 37 | 76,607 | 8,393 |
| | 国際交流学部 | 163,630 | 163,559 | 71 | 143,970 | 19,660 | 149,377 | 149,298 | 79 | 131,354 | 18,023 |
| | 計 | 425,808 | 425,613 | 195 | 370,228 | 55,580 | 400,334 | 400,116 | 218 | 342,455 | 57,879 |
| | 高等学校 | 164,965 | 3,227 | 161,738 | 155,962 | 9,003 | 165,442 | 3,460 | 161,982 | 157,077 | 8,365 |
| | 中 学 校 | 108,337 | 3,226 | 105,111 | 103,728 | 4,609 | 110,664 | 3,460 | 107,204 | 105,862 | 4,802 |
| | 計 | 699,110 | 432,066 | 267,044 | 629,918 | 69,192 | 676,440 | 407,036 | 269,404 | 605,394 | 71,046 |
| | 2005年度 | 676,440 | 407,036 | 269,404 | 605,394 | 71,046 | | | | | |
| | 2004年度 | 714,876 | 454,110 | 260,766 | 594,293 | 120,583 | | | | | |
| | 2003年度 | 633,242 | 378,037 | 255,205 | 570,867 | 62,375 | | | | | |
| | 2002年度 | 667,942 | 410,868 | 257,074 | 626,812 | 41,130 | | | | | |
| | 2001年度 | 588,679 | 333,340 | 255,339 | 545,306 | 43,373 | | | | | |

役員・教職員の概要 (2006年5月1日現在)

理事長 小 塩 節



| | | |
|----|----------------|----------------|
| 理事 | 池 田 守 男 | 大 口 邦 雄 |
| | 岡 野 昌 雄 (学院長) | 奥 田 義 孝 |
| | 金 澤 正 剛 | 金 子 の ぶ |
| | キスト岡崎さゆ里 | 久 世 了 |
| | 公 文 宏 | 黒 澤 淳 雄 (事務局長) |
| | | 6月1日以降、千葉 秀悦 |
| | 武 田 武 長 | 田部井 善 郎 |
| | 中 村 晴 子 (中高校長) | 服 部 ひろ子 |
| | 藤 掛 順 一 | 本 間 慎 (大学長) |
| | 棟 居 洋 | |



監事 大 脇 順 和

岡 本 康 英

教職員数について

| | |
|------------|------|
| 大学教員 | 427名 |
| 中学校・高等学校教員 | 74名 |
| 職 員 | 156名 |

非常勤、嘱託、臨時を含む。副手・助手は大学教員に含む。